

平成29年度 学校評価 自己評価書



- A: 申し分ない取り組みが行われ、十分な成果を上げている。
- B: 必要な取り組みが行われ、改善に向けた成果を上げている、もしくは上げつつある。
- C: 改善に向けた取り組みが見られるが、成果が不十分である。
- D: 直ちに改善を図らなければならない様子が見られるが、改善に向けた取り組みに着手できていない。

大川村立大川小中学校

項目 1		(知)教育課程・学習指導(かしこく)	評 定			
学校教育目標		大川村に夢と希望と感動を!		自己評価	関係者評価	
中長期経営目標		少人数学習を生かしたきめ細やかな小中一貫教育の充実		前年度	B(類似目標)	A(類似目標)
短期経営目標		確かな学力の定着と向上		本年度	B	B
評価項目(目標達成に向けた具体的な取組)		達成基準	達成状況 <具体的な取組の自己評価>			
1	<p>【授業づくり】 ○探求的で主体的な授業づくりのための授業スタンダードを、日々意識して取り組む。 ○1人1回の公開授業研修を行う。 ○授業参観の視点を明確にし、日々の授業に生かせる事後協議を行う。</p>	<p>○全国学力・学習状況調査、県学力調査、CRT等で平均+8を達成する。 ○大川小中授業スタンダードを活用し、児童の発言する場を多く持つ。 ○学校評価アンケートで、児童が学習に関する取組に対して肯定的な評価を85%以上とする。</p>	<p>○全国学力・学習状況調査において小学校は、算国(A・B)の平均が、全国比+4.8、中学校は、数国(A・B)の平均が、全国比+7.7であり、目標値の「+8」には、中学校は、概ね達成されたが、小学校は、もう少しだった。また、県学力調査では、小学校の算国と中学校の英数国理社のすべての合計の平均値が53で、昨年60より、7ポイントのマイナスだった。CRTについては、全国正答率に対して、小学校は社会、中学校は国だけが、+8ポイントを越えている。 ○全クラスの日々の授業で大川小中授業スタンダードを活用し、自分の考えを持たず時間を確保することにより今まで自信がなく発言できなかった児童生徒の発言が、昨年より増えた。 ○学校評価アンケートの「授業中はよく考え、自分の意見を発表できていますか」において肯定的な評価が85%で、概ね達成されたと思われる。</p>			
2	<p>【コミュニケーション】 ○児童生徒用アンケートの作成を通して、児童生徒につけたい力を明確にする。 ○コミュニケーション力をのばすためのあらゆる場面での指導の工夫を交流し、効果的指導内容、方法を共有化する。</p>	<p>○独自に作成する児童生徒アンケートにおいて、コミュニケーション力肯定的な評価が10%以上の伸びがある。 ○授業におけるコミュニケーションに関する重要事項を確認し、児童生徒に徹底する。</p>	<p>○児童生徒用アンケートを作成し、年間2回アンケートを実施した。アンケートの結果、「あなたは、自分の考えや意見を他の人に伝えることが得意ですか」という項目において6月は、肯定的な評価が41.3%であった。2回目(2月)は63%であった。 ○各学級に「協力、質問、説明」をスローガンとして貼りだし、コミュニケーションに対する意識付けを行った。</p>			
3	<p>【ICT】 ○ICT活用研修を継続して行い教員の活用技能の向上を図る。 ○iPadを活用した効果的な家庭学習を研究する。</p>	<p>○授業における効果的なICT活用事例の交流会を通じて集積し、授業改善に活用する。 ○評価アンケート等で、取り組みに対して肯定的な評価を80%以上とする。</p>	<p>○ICT活用事例交流会を校内研に位置づけ、8月には講師を招聘して実施、2月にも行うことにしている。 ○ICT活用アンケート(保護者)にて、学校での活用89%、家庭でのiPad使用83%、が肯定的な評価。児童生徒のアンケートより、ICT活用に関する全項目トータルの肯定的評価84%</p>			
改善 方策	<p>○B問題の学力向上に対して、日常生活と関連した問題を教材としたり、課題に沿って深く考える学習を日々の授業の中で位置づけていく必要がある ○コミュニケーション力について、子どもの意識は向上したが、実態はまだ不十分である。そこで授業の中に発表する場を位置づけたり、日常のあいさつや発表集会、他校との交流など、あらゆる場面で思いを伝える場を設定し肯定的な評価を与え、コミュニケーション力を伸ばしていきたい。 ○授業における効果的なICT活用事例の交流会を継続する。授業と連動した家庭学習を設定し、子どもが意欲的になるiPadの活用について研究していく必要がある。</p>		関係者 評価 講評	<p>○平均とか全体の点数ではなくて、個々の生徒の伸び具合についてはどうか。これに焦点をおいて取り組んでほしい。 ○数値目標は出して客観的に見ていかななくてはいけないだろう。教員の数、子供の数を考えれば、普通は成績は上がるだろう。この人数、この環境であっても、上がらないということは問題。そうとらえてやってもらいたい。</p>		

関係者評価講評

(知)教育課程・学習指導(かしこく)

【項目1】(知)教育課程・学習指導(かしこく) 評価《B》

○平均とか全体の点数ではなくて、個々の生徒の伸び具合についてはどうか。これに焦点をおいて取り組んでほしい。

→中・昨年と比較しても、4月と比較しても伸びている。生活態度や授業への姿勢も良くなっているが、未だ点数には直結していない。

→小・個別にみると春に比べて伸びている。

○数値目標は出して、客観的に見ていかなくてはいけないだろう。教員の数、子供の数を考えれば、普通は成績は上がるだろう。この人数、この環境であっても、上がらないということは問題。そうとらえてやってもらいたい。

項目1		(徳)心の教育(やさしく)	評 定	自己評価		関係者評価		
学校教育目標		大川村に夢と希望と感動を!		前年度	B(類似目標)	B(類似目標)		
中長期経営目標		豊かな心の育成		本年度	B	B		
短期経営目標		思いやる心を言葉や行動で表し、自尊感情の高い子どもや共に伸びる仲間集団の育成						
評価項目(目標達成に向けた具体的な取組)		達成基準	達成状況 <具体的な取組の自己評価>					
1	【道徳教育】 ○道徳の時間の充実 ・ICT、場面絵などを効果的に使う ○道徳教科化に向けた取り組み ○のびのびタイムの充実	○道徳アンケート: 肯定的児童 ・全項目90%以上 ○学校評価アンケートにおいて、「学校生活は楽しいですか」に対して肯定的評価90%以上	○道徳アンケートの結果、小学校は、肯定的評価が、96.8%、中学校が、92.3%で目標値の「90%以上」を達成することができた。 ○学校評価アンケートにおいて児童生徒の「学校生活は楽しいですか」のアンケート項目に対する肯定的な評価が96%で目標値の「90%以上」を達成することができた。					
2	【生徒指導】 ○心の教育推進 ・学期に一回のいじめアンケートの実施 ・QUを年2回実施 ・相談体制の充実 ・児童生徒の支援会の定期的実施 ・SCの定期的な面談	○いじめ解消率:100% ○2回目のQUでは、学校生活満足群の児童生徒を80%、不満足群児童生徒:0 ○支援委員会を学期に1回は行う。	○1学期および2学期にいじめやいじめに類似した事案があったが、指導の結果一定の解消を見た。現在は、経過を慎重に観察している状態である。 ○2回目Q-Uでは、学校生活満足群の児童生徒は86%、不満足群児童生徒:1名 ○SCや特別支援担当の指導主事なども交えた支援委員会を、年間10回(予定を含む)実施し、指導に活かしている。					
3	【図書・読書活動】 ○読み聞かせの実施 ・図書支援員と協力して計画的に行う・小学生が保育園児へ、上級生が下級生への読み聞かせ ○委員会活動の充実 ・学期に一回、読書クイズなどの活動	○生徒アンケートで、「読書が好き」と答える割合90%以上 ○図書貸出数の目標(低学年130冊、中学年:100冊、高学年:60冊、中学生:60冊)	○生徒アンケートで、「読書が好き」と肯定的に答える割合は、中学100%、小学100%。目標値の「90%以上」を達成することができた。 ○4月から1月末までの図書貸出数において小学校の低学年の平均は、190冊、中学年は26.5冊、高学年は、18冊、中学生は、22.3冊で小学校の低学年しか、目標値を達成することができなかった。					
改善 方 策	○道徳の教科化に伴い、道徳の教材や授業について改善していく。 ○SCや指導主事の支援訪問などを活用し、児童生徒の支援体制の充実を図る。 ○「好き」な割に図書の貸し出し数が少ないことを、図書委員会の活躍をもって解消していきたい。		関係者 評 価 講 評	○「図書・読書活動」のところが、評価項目と達成基準とがかみ合っていない、関連が弱いように思う。 ○以前、児童会生徒会との意見交流の時に、読みたい本がないという意見があったが、読んでしまっ借りる本がないということではないのか。本を入れ替えるとか、増やすとかが必要なのではないか。何回も読みたくなるようないい本を、たくさん入れるようにすればいい。 ○2回目のQUの不満足が1名いるが、1回目はどうだったのか。増えているか、減っているか。→1回目の2名は不満足を脱し、新たに1名が入った形で増減がある。 ○学校運営協議会には守秘義務もあるので、児童生徒の状態については、個人名も含めてあったことすべて、いいことも悪いことも具体的に報告してもらいたい。そういう会であるはずだ。				

関係者評価講評

(徳)心の教育(やさしく)

【項目2】(徳)心の教育(やさしく) 評価《B》

○「図書・読書活動」のところの、評価項目と達成基準とがかみ合っていない、関連が弱いように思う。→ご指摘のとおりと思う。来年度は分かりやすくしていきたい。

○以前、児童会生徒会との意見交流の時に、読みたい本がないという意見があったが、読んでしまっ借る本がないということではないのか。本を入れ替えるとか、増やすとかが必要なのではないか。何回も読みたくなるようないい本を、たくさん入れてるようにすればいい。

→小中それぞれ毎年10万円の予算で選書会で選んだ上で購入している。

○2回目のQUの不満足が1名いるが、1回目はどうだったのか。増えているか、減っているか。→1回目の2名は不満足を脱し、新たに1名が入った形で増減がある。

○学校運営協議会には守秘義務もあるので、児童生徒の状態については、個人名も含めてあったことすべて、いいことも悪いことも具体的に報告してもらいたい。そういう会であるはずだ。

項目1		(体)健康・体力(たくましく)	評 定	自己評価		関係者評価	
学校教育目標		大川村に夢と希望と感動を!		前年度	(類似目標なし)	(類似目標なし)	
中長期経営目標		健やかな体の育成		本年度	B	B	
短期経営目標		運動習慣を身につけ、体力と技能の向上					
評価項目(目標達成に向けた具体的な取組)			達成基準		達成状況 <具体的な取組の自己評価>		
1	<p>【健康教育】 ○保小中の生活調べを11月に実施する。 ○生活調べの結果を通信で配布する。 ○生活リズムの学習を実施する前後に行う。 ○保護者への啓発便り・評価表</p>	<p>○学校評価アンケートの「生活リズムに気を付け、規則正しい生活をしていますか」に対して肯定的評価80% ○個人の課題を児童と保護者に説明する場の設定 保護者に子どもの頑張りを評価し、親の協力を要請する</p>	<p>○学校評価アンケートの「生活リズムに気を付け、規則正しい生活をしていますか」に対して、肯定的評価は、保護者は81%、児童生徒80%。 ○月2回程度定期的に発行する保健便りにおいて定期的に生活リズムの大切さを保護者に伝えた。また学期末懇談の際、担任を通し、生活面で気を付けることを保護者に連絡してもらった。</p>				
2	<p>【運動能力】 ○体力づくりの充実 ・年間を通して、計画的な体力づくりを進める ○体育行事の実施 ・水泳大会・マラソン大会・運動会など体育行事に向けた取り組みで体力向上を図る。</p>	<p>○スポーツテストの合計点で全国平均以上 ○スポーツテストで「走」「跳」を全国平均以上 ○スポーツテストや水泳記録会、陸上記録会など各体育的行事の準備期間において、練習(トレーニング)を十分にとる</p>	<p>○スポーツテストにおいて小学校男子は、全国比+1.7、小学校女子+5、中学校男子-1.5、中学校女子+4.3で、概ね全国平均を超すことができた。 ○スポーツテストで小学校全国比「走」-1.8、「跳」+5.9、県比「走」-0.2、「跳」+7.1 中学校全国比「走」-3.0、「跳」+2.2、県比「走」-0.4、「跳」+3.6、 ○マラソン大会の試走や各体育的行事の練習時間は、例年より増えた。 ○高知商業の先生に来てもらって、走力の向上を目指す講習会を実施した。</p>				
3							
改善 方 策	<p>○「走」に課題が認められるため、講師の招聘などして走力アップを目指す。 ○小学児童が、楽しく遊びながら体を動かせる工夫をして、体力アップを目指す。 ○中学生の部活動や授業において、運動量を十分に確保する工夫をし、体力アップを目指す。</p>		関係者 評 価 講 評	※別紙参照			

関係者評価講評

(体)健康・体力(たくましく)

【項目3】(体)健康・体力(たくましく) 評価《B》

- ここでの「走」は短距離、長距離のどちらをあつかっているか。→短距離。シャトルランでは、上の学年より下の学年の方がいい傾向があった。
- 部活・試合を見ていると2セット目にはスタミナ不足ということが多かったので、持久力という観点でも見ていってもらいたい。
- 近隣では自転車通学をしているが、山の学校ではスクールバスや車での移動ばかりで、足を使わない。体力不足になりやすいハンデがある。意識して取り組んでもらいたい。
- 自分たちのころは、全員ではないが自主的に荷物だけあずけて家から走って来ていた。やる気次第、気持ちの問題ではないだろうか。
- 部活においては「勝ち負けへのこだわり」を「勝つ喜び、負ける悔しさ」を持てるよう、やる気につながるようにやっていってもらいたい。
- 体力面では、スクールバスの乗り場までは、歩いていくようにしてはどうか。
- 川口が統合になった頃には、スクールバスには全員乗れなかったのが、路線バスを使うか、自転車で登校していた。山中くんと言って、箱根駅伝にでた先輩もいるくらいだから、歩くことで体力はつくだろう。
- マラソン大会前の練習を、直前の時期だけではなく、もっと長い期間続けるとか、サーキットトレーニングや業間体育とかを、恒常的にやっていくようにしてはどうか。
- かつての話や無理な話をしてもしょうがないので、学校でできる取り組みを考えてやってほしい。

項目1		(知・徳・体)保護者・地域・関係機関との連携 防災・安全教育		評 定	自己評価	関係者評価	
学校教育目標	大川村に夢と希望と感動を!						
中長期経営目標	コミュニティ・スクールを基盤とした学校運営 防災・安全教育の推進			前年度	B(類似目標)	B(類似目標)	
短期経営目標	学校評価や学校経営計画の取組を活用し、組織的・効果的な学校運営の推進 危機を察知し、回避しようとする意識、能力を身に付け、行動できる児童の育成			本年度	B	B	
評価項目(目標達成に向けた具体的な取組)		達成基準		達成状況 <具体的取組の自己評価>			
1	<p>【コミュニティ・スクール 学校支援本部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○PTA活動の充実 ○学校だよりの発行とホームページの充実 	<ul style="list-style-type: none"> ○学校行事への参加と教育環境の整備 ○学校だよりの年間13回発行と学校行事ごとのホームページの掲載 		<ul style="list-style-type: none"> ○主要な学校行事において、お知らせするとともに、多数の参加を得ることができた。 ○1月現在で11号の学校便りを出している。またA3サイズにすることで、内容を増やすとともに、見やすさを考慮している。 ○1月現在で、公式ホームページは113記事(修学旅行、自然体験の報告を含む)、会員制サイトは102記事を掲載している。 			
2	<p>【防災・安全教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○避難訓練を計画的に実施 ○大川村総合防災訓練への参加 ○大川村の防災訓練に全校で参加し、防災に関する知識を学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○多様なシーンを想定して避難訓練を年3回は実施する。 ○学校評価アンケートで、安全管理、安全教育への取り組みに、対して肯定的な評価を90%以上 ○大川村総合防災訓練に参加し、すべての児童生徒が防災に関する知識・体験を得る。 		<ul style="list-style-type: none"> ○火災、地震、ミサイルを想定した避難訓練を実施することができた。 ○学校評価アンケートで、安全管理、安全教育への取組に対して肯定的な評価95% ○大川村総合防災訓練に参加し、避難訓練とともに、模擬炎による消火訓練を全員が行った。 			
3							
改善 方策	<ul style="list-style-type: none"> ○子供の声が村内に響くよう村内放送で学習活動の成果を発表する機会を増やす。 ○授業の学習活動や発表活動として、地域でのふれあいができるような機会を増やす。 ○安全教育では、子ども達の将来に関わる色々な学習ができるようにしていきたい。 			関係者 評価 講評	※別紙参照		

関係者評価講評

(知・徳・体)保護者・地域・関係機関との連携 防災・安全教育

【項目4】保護者・地域・関係各機関との連携、防災・安全教育 評価《B》

○この評価のなかに学校運営協議会に対する評価が入るのはおかしい。コミュニティスクールを標榜する学校として、どんなことが出来たのか、どう地域と連携してきたのかが入るべきである。→ 1細目めを削除。来年度は「コミュニティスクール」や「地域との連携、かかわり」という項目に変える。

- 子供のふるさと放送が長すぎることがある。短く何回かに分けて放送しないと、せつかくの子供の放送なのに飽きてしまう。
- 芸西村との災害協定なども考慮に入れ、大勢の避難者を迎え入れるような想定もしながら訓練をしていくべきである。

○コミュニティスクールが始まった頃は、学校運営協議会は教員にはあんまり関係ないといわれていた。が、結局、取りかかるのは教員だから、コミュニティスクールとはどんなものかとか、地域教材をどうするのかとか、道徳の教材だとか、教員が理解して取り組まないと、毎年同じような結果しかでてこない。

○研究のなかりは授業研究ばかりで、地域連携「地域の教材を生かした授業」とかが入ってない。ここはコミュニティスクールなので、コミュニティの学習と地域の教材を生かした授業の作り方、それにICTと地域の人材を生かした教育の研究とか行事とかを、小1から中3までを系統的に教科でどんなことができるかとか、研究の一つとして、職員の間を意識されていなければならない。いつもそうするという意識がない、体制がないので、いつまでたっても負担感や忙しさしか感じられない。

○そういう意識を持って災害の授業をやった、その授業を見て同僚の先生は「勝手にやりよる」と見るのか「あれこそコミュニティスクール、地域教材を生かした授業」と思うかは大きな違い。道徳でも、災害でバスの上に一日おったという教材は使っても、地域の「手を取り合って逃げた」というおんちゃんの話はなぜ使わないのか。そんなに差があるのか。そういう組織全体での意識があるのかが重要。総合だけではなくて、道徳とか特活とかでも、地域で自分が感じるちょっとした疑問や感じたことを、なぜ教材に出来ないのか。意識の問題。

○コミュニケーション力は、教科内だけではなくて、地域との交流の中でもついて行くものではないか。そちらの学力の方が大切だと思うが。目に見えるか、評価せえ、といわれてもできんけど。そんなことが嫌な先生に限って、「時間がない」と言い訳しそれを責められると「学力が・・・」と言って、あっちとこっちとダブルスタンダードで言い訳を使い分ける。

○問題行動など何にも起きてないところに、僻地手当までもらってきているのだから、地域についての学習も仕事としてやってもらいたい。

○自然と緑がいいのでのんびりやりたいと思う、とか勘違いしている先生がいる。

○学校の体制として、コミュニティを話したとか、研究をしたとかいう記憶はない。研究のなかでの位置づけもないし、総合学習だけの取り組みに毎年なっている。総合で話していることが、職員会だっりのなかで、研究のテーマとしてやりたいとかの発言が弱いのではないか。

○全職員の意識とか、研究の取り組みとかとしてやらないと、地域には誰も出ようとはしない。「出て行けない」のではなくて「出て行かない」が正しい。意識の問題なので「職員数が減ったら・・・」なんていうのも関係ない。やめたらいいようなものも確かにあるが、やめたらいいかんようなものまでやめてしまう。

○毎年同じことだが、コミュニティに取り組む研究体制をしかないとだめじゃないのか。それにつながるような評価と来年への展望としたい。

